

## コロナ禍における大学女子バレーボールチームを対象としたインカレ優勝までの過程

研究代表者 沼田薫樹 (スポーツパフォーマンス研究センター)

メンバー 濱田幸二 (スポーツ・武道実践科学系)、坂中美郷 (スポーツ・武道実践科学系)

### 目的

新型コロナウイルス感染症の世界的な流行について、2020年3月11日にパンデミックとの認識を表明した。我が国においても、新型コロナウイルス感染症に関する緊急事態の発生が4月7日に宣言された。この影響を受け、「新しい生活様式」という考え方が、これまでの考え方や行動を見つめ直す必要性が高まっている。

スポーツ界では、公式戦という自身を表現する場がなくなり、高いモチベーションを維持したまま練習に取り組むことができないという問題を抱えていた(村川ほか、2021)。

そこで本研究では新型コロナウイルス感染症の世界的な大流行に対して、地方K大学女子バレーボール部がどのような影響を受け、どのような対応を行なったかについて概観するとともに、全日本大学バレーボール選手権大会(以下インカレ)で優勝した過程について明らかにすることを目的とする。

### 方法

本研究はコロナ禍にインカレで優勝した要因をシングルケースデザイン(以下SCD)の観点からゲームパフォーマンス項目を用いて検討する。

対象期間は9月1日から9月30日までの夏季合宿、10月3、4、24、25日に行われた強化試合、12月1日から6日に行われたインカレとした。なお、夏季合宿は9月1日から18日までを前半、9月19日から30日までを後半とした。それぞれのセット数は夏季合宿前半が43セット、夏季合宿後半が99セット、強化試合が21セット、インカレが17セットであった。

ゲームパフォーマンス項目はスパイク決定数、バックアタック総数、バックアタック決定数、スパイク決定率、スパイク効果率とした。

本研究は対象とした期間の変化が起きたきっかけを詳細に検討するため、バレーノート(毎回選手がローテーションで記入する日記のようなもの。部活ノート)から記述された文字情報を取得した。さらに、選手の自省報告としてインカレ終了後1ヶ月以内にインタビュー調査を行った。

統計処理は夏季合宿後半(19日~30日)の11日をベースライン期、12月に開催された全日本インカレの5日を試合期として、Tau-u検定を行った。

### 結果および考察

Tau-u検定の結果、スパイク決定数(Tau-u=0.69、 $p=0.03$ )、バックアタック総数(Tau-u=1.00、 $p=0.00$ )、バックアタック決定数(Tau-u=1.00、 $p=0.00$ )が増加したことが明らかになった(図1)。

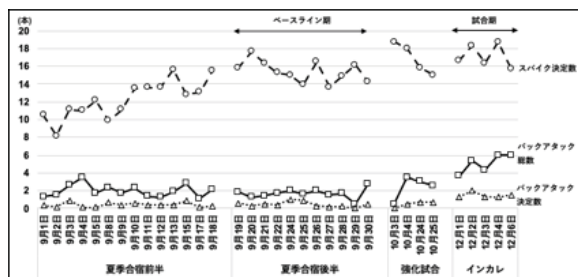


図1: スパイク決定数、バックアタック総数およびバックアタック決定数の時系列変化

K大学は4月から9月まで人数制限を設けた練習をしなければならず、結果として2対2や3対3でのバックアタック合戦といった練習が多くなった。このことから当初予定していた、コンビ練習はできなかったものの、バックアタックでどのように得点を取るのかを考える期間になったと予想される。

9、10月になり人数制限が緩和されたK大学は、夏季合宿や強化試合によってコンビ練習が少しずつ増加した。しかし、これまでコンビ練習をしてこなかったK大学は前衛だけの攻撃だけでは得点力がないと振り返りがあった。特徴的な出来事として、強化試合中の10月3日のバレーノートに、「BA(バックアタック)をラリー中に増やす」と記述しており、コンビの中に前衛だけではなく、後衛のバックアタックを戦術に組み込むことが良いのではないかと反省があった。そしてその翌日(10/4)には、バックアタック総数が前日の0.5本から3.5本に増加した。

### まとめ

本研究は部活ノートによって事実やチームで共有した考えを正確に記述した結果と、ゲーム分析による状況を総合的に考察し、10月の強化試合がターニングポイントであったことが明らかになった。長期間にわたるデータを整理することは現場的価値の高い研究であることから、日々のゲームデータや部活ノートは競技力向上に関わらず、ケーススタディにも重要な研究資料として提示できると考えられる。